



発行日 2005年1月10日

発行人 藤川享胤 編集責任者 浅井宣亮 編集委員 大谷 館盛 太田 菅原

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6

Tel. 03-3361-0614 Fax. 03-3361-0634 URL: <http://www.soto-zen.net/>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.27



桑港寺開創70周年慶讃法会 集合写真

CONTENTS

●巻頭 重々無尽の縁	北アメリカ国際布教総監 秋葉玄吾	1
●特集1 北アメリカ桑港寺開創70周年・好人庵10周年 10年前の感動をもう一度	福島県宗務所長 円通寺住職 吉岡棟憲	2
日米山桑港寺開創70周年慶讃法会並びに国際布教師館寺規弘師入寺式	SZⅠ事務局 菅原研洲	4
●祈りの旅 グランドゼロ ～南アメリカ開教100周年 死者を弔う唯一の存在として	SZⅠ副会長 宗議会議員 瀧澤和夫	6
●「ゆめ観音」in 大船 アジアフェスティバル報告	SZⅠ事務局 亀野哲也	8
●特集2 SZⅠ両大本山ワークショップ報告 「アメリカの禅」後編	アンカレッジ禅センター 堂長 秋山洞禅	10
両大本山SZⅠ講演会アンケート結果		13
●特集3 南アメリカ開教100周年 伯国イビラスー禅光寺創立30周年慶讃式典・記念行事	永明寺 住職 加藤孝正	15
南アメリカ開教100周年記念行事に参加して	養雲寺 副住職 青野貴芳	18
●SZⅠ通信 元ハワイ別院正法寺・ハワイ開教総監 大山興隆老師ご遷化		22
ハワイ・モロカイ島カラウババ半島訪問	SZⅠ事務局 太田賢孝	22
聖護寺国際安居レポート	SZⅠ事務局 大谷有為	23
●寄付者・会費納入者名簿		24

巻頭

重々無尽の縁

北アメリカ国際布教総監 秋葉玄吾



日米山桑港寺開創70周年・白雲山好人庵禅堂10周年慶讃法会が盛況裡に無事円成致しました。SZIからも20名程の方々がサンフランシスコ方面に赴き、慶讃法会への祝意を表して頂きました。この場をお借りして、皆様に御礼を申し上げます。おかげをもちまして、楽しく親睦交流が出来、大変和やかな慶讃法会でありました。ありがとうございます。

桑港寺・好人庵の法会が済んでから、しみじみと感じたことがあります。それは「なにか目に見えぬ、大きなものの力が働き、私達を結びつけている。その大きな力に生かされて、素直に私達も我が命を働かせば、思いも寄らぬ良縁の輪の中で、心満たされ生きる事になるんだな。」という想いです。「重々無尽の縁起」つまり、あらゆるものは互いに縁となって現れ起こっている、私達自身の在り方、世界の真実相を感じずにはられません

でした。

そして、寺を護り、信仰の灯をともし続けてこられた先人開教師、檀信徒の方々の帰依三宝の篤きことを想わない訳には参りませんでした。そして「法界円融」(一切の存在が欠けることなく満ちており、完全に一体となって融け合い妨げがない)、という言葉連想しました。仏法僧の三宝を奉じて生きる人は、ブッダの教えという絆に結ばれて、重々無尽の縁の中で、広く十方に連なり広がり、法界円融の法悦を深く味わい、安楽な境涯を感得するのだなあ、と感慨に耽ったのでした。

現在、世界では各地で宗教戦争の体を為している紛争が勃発しております。アメリカはその主要な要因の一つに挙げられ、風当たりが世界で強くなっているように思われます。しかし寺は、動揺する世の中にあっても、慰め、安楽、祈り、調和の場でなくてはならない、そのようなみ寺であり続けるよう、皆様と共に精進を致したいと感じました。

特集1／北アメリカ桑港寺開創70周年・好人庵10周年

10年前の感動をもう一度

福島県宗務所長 吉岡棟憲（円通寺住職）



吉岡棟憲老師

"10年前の感動をもう一度"

今回の桑港寺開創70周年、好人庵10周年慶讃法会への団参を福島県宗務所が企画したのはこの思いの強さがあったからだ。

10年前とは94年10月のこと。当時の桑港寺住職細川正善師が福島県猪苗代町天徳寺出身、更に好人庵を興した秋葉玄吾師が福島県梁川町の生まれ。この縁

をもって両師との繋がりが深い30名が福島から海を渡った。

寺島彦宗宗議（龍鳳寺住職）を団長に、金平祖隆宗務所長、辻淳彦布教師（興国寺住職）等のお歴々と一緒に私も同行の機会を得て、アメリカでの禅の普及の様子と外国人の熱心な禅への取り組み、そして現地開教師の並々ならぬご労苦の実情を見聞することができた。この折りに修行された好人庵の開山式と、サンフランシスコ市リトルジャパン内にある"歌舞伎シアター"で開催された「禅を聞く会」随喜での感動が、その思いの原点にあった。それは、風光明媚且つ閑静なオークランド市の住宅地の一角に、堂々と建立された日本式禅庵と、その景観の美しさに溜息をつき、「禅を聞く会」では800席の会場が外国人で埋まり、辻淳彦老師の法話の後に指導担当させていただいた椅子坐禅、あの大柄な外国人が私の指導に従い、じっと坐り続けていた光景と感慨が昨日のように思い出された。10年を経た今年、あの感動をもっと多くの人に味あわせたいと今回の募集に至ったが、残念ながら参加者13名の小さな団体となってしまった。

しかし、修行された2ヶ寺での大法会には日本各地から約60名の関係者が集い、現地宗侶と共に見事にすべての法要を円成させた。我々もその一翼を担ったと思うと、参加者全員新たな思いが湧いてきた。

好人庵開創10周年法要は10月23日（土）午前10時より厳粛に執り行われたが、参加者が多数に及び、好人庵禅堂から場所を移し、寺族（秋葉よしさん）が経営する日本料理店「YOSHIS」が会場となった。

「YOSHIS」はオークランド市がウォーターフロント事業として開発した新市街地の中心にあり、その中でも最も人気のある飲食店として名を馳せているとのこと。ジャズを中心とした著名な演奏家が全米から集まる豪華な音楽ホールと、日本の畳を用いた約100席の和風料理の店構えはとても魅力的であり、時折店の前の大通りを通過する広軌鉄道列車の姿や

汽笛は、日本では絶対に味わえない趣があった。

広いホールに造られた特設の祭壇での法要は如法に進められ、その厳かさは現地の方々に大きな感銘を与えたことであろう。

法要後、参加者は改めて好人庵を拝登させていただいたが、広い境内、計算された伽藍配置、鯉が泳ぐ池が見事な日本式庭園、新築された茶室、日本の工芸品や秋田犬、日本の心を敷きつめた美的感覚の素晴らしさに、皆感動を覚えた。

一方、サンフランシスコ市桑港寺70周年慶讃法会は同23日夕刻に開山忌速夜、翌日の法要習しが綿密に修行され、婦人会が用意した歓迎の手作り料理で懇親を深め、24日（日）の大法要を迎えた。

新命館寺規弘師の入山式、開山、歴住忌法要をメインとし、檀信徒の諸願成就を願っての大般若経六百卷の転読も行われた。経本が転翻される法要を現地の人がどう捉えたのか興味深かった。

この日は、好人庵の小雨模様と違って快晴に恵まれ、威風堂々と法要に臨んだ若き新命和尚の前途を祝い、今後益々の活躍を祈るかのようであった。

今回の2ヶ寺での法要導師は日本から駆けつけた尊宿諸老師が勤めたが、10月で退任される大本山永平寺南澤道人現監院老師と、11月から同監院職に就かれる森嶺雄老師がご一緒されたご因縁の有り難さは特筆すべきことであろう。

他に大本山永平寺副監院武田秀嗣老師、宮城県峯仙寺千葉省三老師、静岡県山王寺青山嶺雲老師が法要導師を勤められた。

我々団体13名は住職、寺族、青年僧、在家者など幅広い層からの参加であったが、それぞれの立場からこの旅行に感動し感慨に耽っていた。参加者の感想こそが今回の法要参加の意義と素晴らしさを物語る。

同行中に聞いた参加者の感想を記して旅行記としたい。



好人庵10周年記念



歴住忌法要の御先導師を務める

■土田 正伸（福島県大同寺住職）

海外での布教活動の厳しさと必要性を実感した。好人庵にて宗門の海外布教を強化すべきと語る秋葉玄吾師の情熱に感動した。

■熊倉 光瑞（福島県隣松院住職）

70歳にてアメリカの法要で両班位に就いたのが最高の思い出になる。立派な本堂や伽藍に海外曹洞宗のイメージが変わった。

■田中 徳雲（福島県同慶寺副住職）

裏方の仕事でも随喜できたのがうれしい。あと数日滞在してもっと現状を把握したい。とてもいい経験であり体験となった。

■八島 国雄（秋田県天龍寺住職）

永平寺で共に修行した秋葉師の頑張りに敬意を表す。同安居者多数が日本から随喜する法友の結束力にも驚いた。

■菅原 研洲（宮城県城國寺副住職）

アメリカで育った現地僧侶たちが40を越す布教所に分かれて独自の修行を展開しているという。別の機会に是非見てみたい。

■長谷川 泰彦（山形県輪王寺徒、駒大4年）

海外を見ること、実際を知ることの大事さを知った。あとは体験することなので機会をみて挑戦したい。これからの宗門は海外布教抜きでは考えられない。

■土田 八千代（福島県大同寺寺族）

国際布教師を支える寺族の力の大切さを肌で感じた。

婦人会の人達から頂戴した接待に、教化の力が潜んでいた。ただ感謝。

■八島 綾子（東京都専門学校生）

青い眼の方たちが剃髪し墨染めの衣をまとっている姿は日本の青年僧以上に凛々しく真剣さが伝わってきた。曹洞禅の未来を象徴しているようにも思えた。

■山口 淳一（群馬県会社代表）

SZIの活動に協賛して今回も参加した。海外の厳しい状況の中で布教の幅を広げていく青年僧に教えられることが沢山ある。

■黒宮 ヤヨイ（栃木県主婦）

甥（細川正善）が19年間住職していたお寺に初めてきて感激で一杯。大変な苦労があった分、今では立派な福島の住職になった。海外での体験は人を大きくしてくれます。

■細川 正善（福島県天徳寺住職）

思い出の桑港寺が立派な住職に引き継がれて安心。時代の流れの中で寺院経営は厳しさを増すが、情熱をもってすれば必ず人は応援してくれます。今回アメリカに来て下さった各位に心から感謝。

■福島 伸悦（埼玉県興徳寺住職、SZI副会長）

次期SZI会長を引き受けるが、今回の大法要を無事円成できてホッとしている。これを機に多くの方に海外布教への関心と、SZIへの入会をお願いしたい。そして国際布教師支援態勢ををしっかり整えたい。

■吉岡 棟憲（福島県円通寺住職、宗務所長）

13名の小粒な団体だったが皆真面目な方ばかりでとても良い雰囲気だった。次の機会には若い宗侶を含めて多数参加し実体験されることを心から希望している。



大般若経六百巻の転読

特集1／北アメリカ桑港寺開創70周年・好人庵10周年

日米山桑港寺開創70周年慶讃法会

並びに国際布教師館寺規弘師入山式

S Z I 事務局 菅原研洲（宮城県城國寺副住職）



歴代国際布教師への報恩諷経

去る2004年10月24日、日米山桑港寺開創70周年慶讃法会並びに国際布教師館寺規弘師入山式が厳粛な雰囲気の中で修行された。この日は前日までの曇天が嘘であったかのように晴れ渡り、祝事に花を添えた。

この度、曹洞宗国際センターに転任することになった桑港寺第10世主任開教師である南原一貴師（在任1997～2004）の後を承けて、第11世の主任開教師として入山されたのは宮城県雄勝町津龍院の館寺規弘師である。館寺師は御尊父に当たる津龍院御住職・館寺昌晴老師が、現在の北米総監・秋葉玄吾老師と御昵懇であることもあり、永平寺安居を終えられた後に立志され渡米、秋葉総監の指導を仰ぎながら各地の禅センターを回られ、人柄と教化に対する熱心さから特に請われ、わずか29歳で桑港寺に入られることになった。入山式では管長代理の秋葉総監から委任状が手渡され、香一片に法語を添えて、自ら日米両国の架け橋として国際布教に携わる決意を表明され、メンバーはもとより桑港寺の内外に自らの就任を宣言した。

当会の皆様には既知のことと思われるが、日米山桑港寺は今から70年前の1934（昭和9）年にロサンゼルス禅宗寺の開山でもあった磯部峰仙老師によって現在地とは異なるBush St.にあったユダヤ教寺院を買収し

て開かれた。サンフランシスコ在住の日系移民の信仰の源として心を癒し、そして日系人以外にとっても、曹洞宗の宗義弘通を担う北米開教の拠点となった。その後も日本からは歴代の海外開教師（現在は国際布教師）が派遣されて、日本での檀家・信者に当たるメンバーを導いてきた。

戦中戦後の混乱期にはメンバーがアメリカ合衆国政府によって強制収容され宗勢が著しく減退した時期もあったが、歴代の開教師を中心にそれを支えるメンバーにより復興した。歴代の開教師の中には、当会報にて数度にわたって取り上げられている鈴木俊隆老師（第6世、在任1959～69）の名前も見える。米国人への布



館寺規弘師(左)と御尊父 館寺昌晴老師(右)

教教化を強め、参禅者を増やし"禅センター"を開設したことで知られる。

さて、元々Bush St.にあった桑港寺の伽藍は本来がユダヤ教の寺院であったため、建築様式の異質さは如何ともし難く第8世主任開教師として派遣された現SZI会長・藤川亨胤老師（在任1973～78）の在任中には更なる移転が検討され、第9世目の主任開教師となった現SZI監事である細川正善老師（在任1978～97）の在任中、1984（昭和59）年に移転並びに伽藍新築、そして落慶法要が行われ、Laguna St.に見られる現在の姿となった。

さて、今回は、永平寺の前監院・南澤道人老師と、11月1日から監院に就任された森嶺雄老師を御尊宿に拝請して法要が行われた。まず歴代の国際布教師へ報恩の諷経が、館寺師を幼少の時から知る宮城県津谷町峰仙寺御住職・千葉省三老師の導師によって行われた。また桑港寺をこれまで支えてきたメンバーの尽力を感謝する追善供養が執り行われ、これは館寺師が導師を勤める最初の法要となった。最後には永平寺副監院・武田秀嗣老師の導師によって、開山70周年を祝う大般若転読法要が荘厳かつ雄壮に執り行われ、メンバーの益々の繁栄と桑港寺の更なる発展が祈願された。

法要終了後には、場所を市内のホテルに移し昼餐会が行われた。そして婦人会長の萩原タナコ氏と前婦人会長である勝山洋子氏による来賓紹介の後、まず挨拶に立ったのは、桑港寺理事長の沖山泰彦氏であった。沖山氏は、改めて磯部老師による桑港寺開山の由来について触れ、今後もその恩に報い、法燈を護持していくことを述べられた。祝辞は、今回の法要で導師を勤められた千葉省三老師と武田秀嗣老師、そして秋葉総監より頂戴した。千葉老師は幼少から知る館寺師がメンバーの支えで更に成長してくれることを期待され、また武田老師はご自身と因縁浅からざる桑港寺のつながりを回顧された。秋葉総監は、食事前の挨拶が長くなるのは如何なものかと述べつつ、長いご挨拶を述べられた。禅宗寺・小島宗明師による食前の合掌の後、230年程の歴史しか持たないアメリカ合衆国で70年の歴史を持つことがどれほど素晴らしいことであるかを力説した藤川会長の音頭で乾杯し、食事が始まった。

昼餐会の途中には、桑港寺の維持に尽力されたメンバー4人（安藤寛氏、藤井佐恵子氏、藤井琢磨氏、勝山重男氏）に対し、管長猊下からの表彰状が秋葉総監の代読で贈与され、その労がねぎらわれた。

清興として、藤間流日本舞踊が披露されて食事に彩りを加え、また細川老師の在任中に設立された少林寺拳法道場に所属するメンバーによる演舞が行われると、アメリカに根付いた日本文化に対し、会場から拍手喝采が鳴りやむことはなかった。

こうして、日米山桑港寺開創70周年慶讃法会、並びに歓迎昼餐会は滞りなく円成した。



館寺師が初めて導師を勤めメンバーの追善供養を行う



千葉省三老師を導師に迎える



熱心に手を合わせる参列者



桑港寺婦人会の方々

祈りの旅 グランドゼロ～南アメリカ開教100周年 死者を弔う唯一の存在として

S Z I 副会長 瀧澤 和 夫（東京都東長寺住職・宗議会議員）

アメリカのそして資本主義の象徴と言われたワールド・トレード・センターが倒壊してから、3年が経った。この7月5日、アメリカの独立記念日に跡地に建設される「フリーダムタワー」の起工式が行なわれたばかりだった。犠牲者の追悼施設なども建設されるらしいが、今なお生存確認が出来ていない方々もおられ、遺族の一部は建設に反対しているという。2004年8月ペルーで開催された『曹洞宗南アメリカ開教100周年記念行事』の参加に合わせて、ぜひとも訪ねたい場所だった。

ニューアーク空港に着陸したのは大正解だった。空港からニューヨークのホテルへ向かう途中、ハドソン川を挟んだ対岸の右手遠方にマンハッタンを一望することができる。当然だが、やはりあの二つ並んだビルは無くなっていた。というより、存在していたことを思い出せなかったと言った方が正しいかもしれない。記憶を辿りながら、鈍よりとした空に二つのビルを描いてみた。その途端、旅客機がビルに突入していく映像が浮かんできた。あれは確か夕餉を終えてのんびりしていた頃だったと思う。突然切り替わったテレビ画面は、現実起こったこととは到底思えないような映像だった。まさに今突入しているとする場面をはっきりと覚えている。あの瞬間の映像をなぜ撮ることができたのか、今でも不思議でならない。そのまま現地に向かってよかったのだが、あの事件の起きた朝と同じ時間を体験してから訪ねてみたいと思い、その日はホテルで休むことにした。

これこそニューヨークの朝！セントラルパークでは、ベンチで新聞を広げる人、ランニングをする人、犬を散歩させる人、それぞれに様々な朝を過ごしていた。パンを片手に歩く姿に違和感を感じない。信号待ちする人々は交差点に溢れ、行き交う車の列は誰も入ることができないほど車間を詰めていた。きっとあの日も今日と同じ朝だったに違いない。中華街で朝粥をと思いタクシーを拾ったが、目当ての店を探すことはできなかった。そこから目的地は、すぐ傍だ。

建ち並ぶビルの谷間に出現した突然の広い空間は異様としか言いようがない。平日のニューヨークにも関わらず、高いフェンスに囲まれたその場所では数え切れないほど多くの人々が祈りを捧げていた。発表によると2749人もの人々が亡くなったという。あれ以来、何万人もの人々がここで涙を流していったに違いない。すでに整地されたグランドゼロには、ビルの瓦礫から出てきたという鉄骨の十字架が威容を放って聳え立っていた。

隙間を縫うようにフェンスに進み、改良衣に着替え絡子を掛けた。途端に私の周りには空間ができあがってい

た。十字架を前に経を唱えることに何の躊躇もなかった。私を取り囲む人々の中で「大悲心陀羅尼」を唱え終えると、突然金髪の婦人が近寄って来た。彼女は穏やかな笑顔と共に、ゆっくりとそして丁寧に声を掛けてくれた。

「Thank you」

自分が僧侶の身であることを有難く感じたのは、久しぶりのことだったように思う。

けっして、テロを許してはならない。しかし、暴力による連鎖によってさらに多くの命が奪われている。先日、アメリカ大統領選挙を前に、テロの首謀者といわれるウサマ・ビンラディンの声明が発表された。ビンラディンが反米に転じたのは、1991年の湾岸戦争でサウジアラビアに米軍を進駐させたことが発端となったという。イスラム教徒にとってサウジアラビアは二大聖地のある国。神聖な土地を占領していると批判している。「我々があなたたちと戦っているのは、我々が自由な人間であり、かつ我々の国に自由を取り戻そうと望んでいるからだ。あなたたちが我々の安全を破壊するなら、我々もやり返す。我々を痛めつけない国は、安全を確保される。イスラム世界への力による介入政策を変更せよ。」という言葉が偽りや見せかけではないとするならば、これを無視することはできない。

翌日のフライトでペルーの首都リマに向かった。着陸態勢に入って最初に目にしたのは、丘の上高くに聳える十字架だった。

16世紀初頭にペルーを征服したスペイン人フランシスコ・ピサロの一団は、スペイン国王の命を受けた宣教師だったという。彼らは新しい領土を獲得し黄金や財宝を奪う一方で、キリスト教を人々



ニューヨーク
ワールド・トレード・センター跡



カニエテ慈恩寺 盂蘭盆会法要

に伝えるという使命感も持っていたはずだ。しかし、その方法は余りにも強引で残忍なものだった。強大な勢力を持っていたインカ帝国の皇帝アタウルパを処刑し、その死に際し『フランシスコ』の洗礼名を与えたという。そして、すべての神殿を取り壊すとともに、かつて神殿のあった礎石の上に豪華な教会を建てていった。その建築や内装の全てはインカの人々の手に依るといふ。さらには、異教徒への激しい追及と弾圧を続け、改宗を強いていった。現在、ペルー人口の90パーセント以上がカトリック信者となっている。

クスコの案内をしてくれたガイドはスペイン人を父に、先住民を母に持つMARISOL DELCADO CHOQUEという名の女性だった。文化や言語までも取り上げられた侵略の歴史を語りながらも、自分の中に流れるスペイン人の血を受け入れざるを得ないという矛盾を吐露してくれたことに感謝している。その真摯な言葉に、かつて朝鮮半島に侵略し併合した日本が行なってきた事実を今更ながら振り返る機会を得た。

リマにある日秘文化会館で行なわれた記念行事は、「宗教と世界平和」と題したパネルディスカッションから始まった。ペルー在住のヒューバート・ランシャー神父とアルゼンチン安楽寺住職リカルド・道久師の両名による発表は、残念ながら全てスペイン語で行なわれたため内容を把握することができなかったが、演題から想像する内容には非常に興味があった。ぜひ、当日の内容を日本語にして公開していただきたいと思っている。

開会の言葉に続き、「開拓移民ならびに日系人物故者慰霊法要」ならびに「100周年慶祝法要」が営まれた。導師上殿に際し御詠歌を奉詠したネストル・カスティージャ氏が率いるグループは、Amigos del Budismo Zen（禅仏教同志会）と呼ばれている。彼らの中には日系人も含まれてはいるようだが、ほとんどはスペイン系の顔立ちをしていた。1997年、リマ市の公園の一角に集まり共に坐ることから始まった。ただ坐禅をし続けていく中で精神的な指導者を欠いていることに不安を抱く時もあったが、その努力が結実する日を待ち望みつつ互いに支えあっていったという。2002年10月、ついに曹洞宗南アメリカ国際布教総監三好晃一師の教えと指示に出会うこ

ととなり、今回の100周年記念を機に正式に曹洞宗の戒を受けるに至っている。彼らは、まさに自らの意思によって曹洞宗の弟子となったのである。

翌日はカニエテの慈恩寺にて「開山歴住諷経」並びに「盂蘭盆会法要」に随喜し、引き続き、日本人墓地へと向った。予想はしていたが、やはり無縁塔には「十字」が刻まれていた。次に向かった市営墓地でも、日系人先没者を祀る墓石の上に十字架が立っていた。そして、有田恵宗宗務総長の導師のもと、4日間にわたるペルー北部日本人墓地墓参団の方からも、墓地には必ず十字架が立てられていたと伺った。カトリックの力をまざまざと感じた。しかし、その力をけって肯定するべきもなく、歴代の開教諸師の地道なゆめめ努力こそ賞賛されるに値する。現在、ペルーには10万人とも言われる日系人社会が形成されており、前述したようにそのほとんどがカトリック信者ではあるが、今でも仏教的習慣を護持し仏壇を祀り墓参りを続けている人も少なくないという。

一方で、1990年に日本の出入国管理及び難民認定法が改定されて以来、約4万人のペルー日系人が日本に居住しているといわれている。さらには、日本に来て働くことは日系人のみならずペルー人にとっても選択肢の一つになっている。出稼ぎから移住へと変化してきている中、かつての日本人がそうであったように日本で亡くなっていく人も出てきている。現在日本にいるその方たちへの対応をどのように捉え進めていけるのか、今また新たな課題を与えられているのではないかと思う。

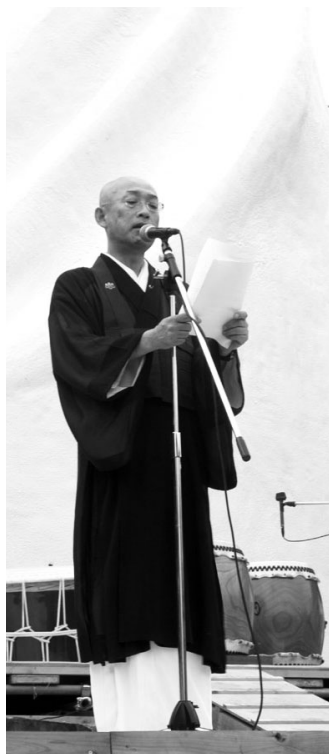
信仰と死者儀礼、この重要な課題は宗門が現在抱えている大きな問題である。信仰と死者儀礼が一体となっていたからこそ、その信仰は綿々と引き継がれてきた。しかし、信仰の自由が保障されている社会において、死者儀礼が故人と遺族の間で宗教上の乖離を生むことは必然として起きてくる。死者儀礼が故人を対象としつつ同時に遺族を対象とするものであるからこそ、今再びそこを布教の場として捉え直していく必要があるのではないだろうか。世界に広がる国際布教師の方々の努力に学び、信仰と死者儀礼の両面からの入り口を用意していきたいと思う。そして、われわれ僧侶が死者の弔いを担うことのできる唯一の存在であることに自負を持ち続けていきたい。



ペルー日本人墓地

「ゆめ観音」in大船 アジアフェスティバル報告

S Z I 事務局・ゆめ観音担当 亀野哲也（神奈川県貞昌院副住職）

瀧澤和夫 S Z I 副会長
による平和宣言

ゆめ観音実行委員会

開催日

平成16年9月4日

開催場所

大船観音寺境内

主催

ゆめ観音実行委員会

後援

鎌倉市・神奈川県
国際交流協会・
神奈川新聞社アジアフェスティバルの
開催意義

平成16年9月4日、
第6回ゆめ観音アジアフェ
スティバルが、大船観音
寺を会場として開催され
ました。

大船観音寺境内の白衣観
音像は、もともと観音思
想の普及とともに世界の
恒久平和を祈願して建立

されたものです。また、アジア共通の心のよりどころと
なっている観音像は、アジア各国の方々の信仰を広く集
めています。大船の地より、平和の願いを日本からアジ
ア各国へ、そして世界へと広げていきたい・・・「つながる・
ひろがる・アジアのねがい」をスローガンとして、今回
で第6回目を数えました。

ゆめ観音アジアフェスティバルは、大本山總持寺監院・
大船観音寺住職・伊東盛熙会長、以下大船観音寺、S
OTO禅インターナショナル、地域を中心に組織された
「ゆめ観音実行委員会」により運営されています。平成
14年開催の第4回より鎌倉市の後援を得ることができ、
今回はさらに神奈川県国際交流協会、神奈川新聞社の
後援により開催しております。

台風接近の中での開催

開催日当日、台風16号の影響により、早朝まで雨が
降り続いており、屋外に設置されたステージでの開催が
危ぶまれましたが、午前中に雨も上がり、しばらく天気
が持ちそうだという判断から、可能な限り行うことを決
定いたしました。

会場には、神奈川県国際交流協会（かながわビエン

ナーレ児童画絵画展示）、インド政府観光局（インドに
ついての紹介）、新宿アショカ（カレー）、ネパリ・バザー
ロ（民芸品、喫茶）、キョウダイ・ジャパン（ペルー料
理）、We21ジャパン（アジア支援のショップ）、アラス
ネットワーク（タイ料理）、スリランカキャンディアンダ
ンス研究所（家庭料理）、地球市民の会かながわ（少数
民族民芸品）、SOTO禅インターナショナル（世界に広
がる禅の世界展示）などのブースが所狭しと並び、賑わ
いをみせていました。

舞台では、正午よりゆめ観音実行委員会による開会・
平和のメッセージが宣せられ、わせだ風街宣伝社（ちん
どん）、湘南・西湘支部舞踊同好会（朝鮮舞踊）、シャ
オ・ロン（中国琵琶）、コンフント・ペーニャハラナ（ペ
ルー民謡）、スサンタ・スーラセーナ、クムディニ・スー
ラセーナ（スリランカキャンディアンダンス）、和太鼓十
三（創作和太鼓）が次々と披露されていき、最後はゆ
め観音実行委員会代表・SOTO禅インターナショナル
副会長・東長寺住職・瀧澤和夫老師による平和宣言と
締めめの言葉で幕を閉じました。

予定されていたカンボジア舞踊など数組と万灯供養法
要が中止となってしまいましたが、雨がいつ降ってもお
かしくない天候の中、約1000人もの来場者で盛大に無
事終了することができました。

当日集まりました入場料は、かながわ民際協力基金
に約20万円の義援金協力をさせていただきました。

— 出演者・関係者からの寄稿・感想文 —
（幾つかをご紹介します）

大船観音寺を舞台に、毎年、アジア各国の若い人達
が「平和と友好」をテーマに音楽を主体としたイベン
トが開催されている。

今年で6年目、年々、参加する国々や内容が多くな
り、その輪がどんどん広がって内容も多彩になった。今
年も和太鼓を始めとして、華麗なお国柄の舞踊や各国
の珍しい楽器などが披露され、出店などでは国々の産物
が販売される。雨上がりの深緑に囲まれた小高い山頂に
巨大な白亜の観世音菩薩の上半身が鎮座し、瞑目した
尊顔が微笑んで居るように見える。

寺務所の周辺には、インド、ペルー、スリランカ、フィ
リピン、タイ料理、喫茶、民芸品店が並び大船観音へ
の参拝客や近郷近在から今日のイベントを目的に山に登っ
てきた多くの人々が群れていた。遠く大船駅のアナウ
ンスのラウドスピーカーからの声も聞こえ、もうすぐ錦秋
に彩られる山々も晩夏の深緑をとどめていた。

名手中国琵琶のシャオロンは特別参加し、中国の古



中国琵琶を奏でる
シャオ・ロンさん

典名曲「十面埋伏」をメインに数々の佳曲を演奏。多くの聴衆を魅了した。

一面の琵琶から発する多様な音色は、驚愕に値する。奏法は、日本の琵琶と異なり構造的にはリュートやウードに似て奏法もバチで叩くように奏する日本の琵琶と異なり、フレットの数も多く爪で弾くのはギターやリュートのようである。直接指で弾くから、幽かな音から過激な擦過音までを微妙に過激に演奏することが出来、中国の四季を、滔々と流れる黄河を、百万の兵が挙げる関の声や剣戟の響きを、そして春夏秋冬の風物や人々の喜怒哀楽、山川草木、幽玄の中に誘導、その高度なテクニックで聴衆を魅了した。

河を、百万の兵が挙げる関の声や剣戟の響きを、そして春夏秋冬の風物や人々の喜怒哀楽、山川草木、幽玄の中に誘導、その高度なテクニックで聴衆を魅了した。

追 記

殺伐な事件が毎日のようにTVでリアルに放送され、皆が不感症になるのが怖いですが、子供達にとってはゲーム感覚で見て貰っては困る情景です。皆さんのイベントが世界に通用し子供達に平和で安定した時代になるようお願い致します。イベントは、一過性では困ります。参加する人、出演する人達が、多くの次世代の子供達に何かを生み出す、そんなイベントを続けて下さい。

有り難うございました。でも、若い、青年達が嬉々として働いている姿は良いですね。

明日は大丈夫、と確信致しました。

(早崎日出太・シャオロンプロデューサー)

7月14日に結成。ばたばたと猛暑の中練習し、9月4日、雨が危ぶまれる中、初めてのステージに上がりました。一度は雨のため中止との連絡が入りましたが、雨雲を押ししのけステージが実現！

白いステージ、背中に白い巨大な観音様。。

その名も「ゆめ観音」

滅多にできない、貴重な体験。お寺でのライブでした。観客の多くは地元の人。そしてアジアの人々。アジアのご飯に舌鼓を打ちつつ、アジアの舞踊や音楽を聴く。そんな企画にペルーの風を吹かせていただきました。

ペルー屋台も出現し、われわれのレパートリーである「Picaron(ドーナツ)」や、アンティークチョ、ポーヨ等がペルーの雰囲気を演出しておりました。

演奏はまだまだですが、とても楽しませていただきました。大船観音様。ありがとう。Muchas Gracias！ 合掌。
(コンフント・ペーニャハラナ)

先日は楽しいおまつりに参加させていただき、ありがとうございました。

タイ、ミャンマーなど仏教国のこども達支援をしているわたしたちにとって、寺はいつでも理解者であり、協力者であり、すばらしい人格の僧侶に出会うことは学びでもあり喜びでもあります。日本の地においても、お寺さんと共に何かができるということはたいへん嬉しいです。

来年も又楽しいおまつりになりますよう。ぜひ又参加させてください。(売り上げは約8万円もありました)感謝と御礼まで。

(地球市民の会かながわ)

この度の大船観音様での催しでは多大に御足労を頂き御礼申し上げます。思いもかけず良い場所での踊りで神様より大きな力をいただきましたようで意義ある時になりました。又お会いできる機を楽しみにしております。

(スリランカキャンディアンダンス研究所)

先日は大変お世話になりました。

今年も声をかけていただきまして、本当に有難うございました！

私は今年で三回目の出演でしたので、大船の町を練り歩いていると、なんだか懐かしい気持ちでいっぱいでした。直前まで心配された天気もなんとか持ちこたえ、大船の町の皆さんの暖かい雰囲気のおかげで、楽しく街廻り宣伝をすることができました。今年も夢観音フェスティバルに参加させて頂いて本当によかったです。

また、来年もご機会ございましたら、宜しく願い申し上げます。次回はもっと大人数で賑やかに伺いできればと思っています。

早稲田ちんどん研究会(わせた風街宣伝社)

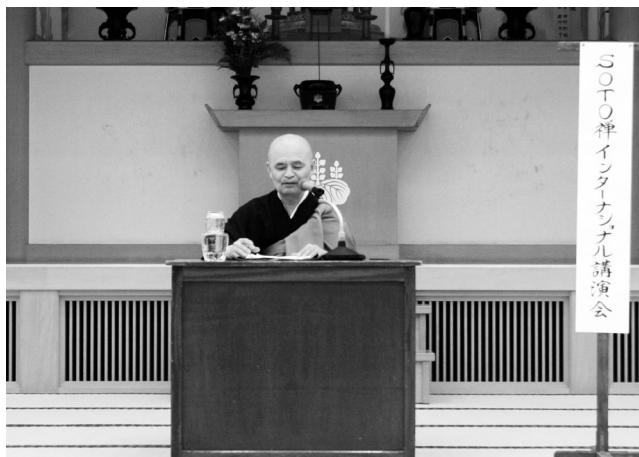


境内にはアジア各国の店が並んだ

特集2 / S Z I 両大本山ワークショップ報告

「アメリカの禅」後編

アンカレッジ禅センター 堂長 秋山洞禅



秋山洞禅師

(前号からの引き続き)

1. 世俗主義

奥村師によると、世俗主義とは「この世界が神によって創造された神聖なものだとはみなさない、科学的、理性的、人間中心的な立場」です。アメリカ人がメンバーになる動機として、私が最初に挙げた「1. 神に対する疑問」に通じ、私のゼン・センターのメンバーが増えない理由の中で述べた「私にとっての禅は救いを求める場ではなく、真理探究・真実の生き方を求める場」にも共通すると思います。

2. 個人主義

ビュルフェルト教授の説明では、この場合の個人主義とは「(仏教を)個人的体験のための媒体として取り扱う傾向」であり、その意味では「仏道をなろうというは自己をなろうなり」の道元禅師の教えも、個人主義の宗教に他なりません。もちろん、それは利己主義、勝手主義の意味ではなく、奥村師が言われるように「自己をなろう過程で、我としての自分などは無いという、無我の真理を教えられ、万法に生かされている自己の実相に目が開くのだと思います。そこで、万法とともに生きる姿勢が出来、衆生無辺誓願度という菩薩の誓願の意味が理解されてきます。」つまり、個人的な坐禅修行により、私が前に述べた「我々人間は完全無欠な大自然の働きにより完全な世界に生かされているという根本的な事実」に目覚め」ということに通じるものです。

3. 折衷主義

「アジアのほとんどすべてといってもいい国々から輸入された様々な形態の仏教…心理学、「ニューエイジ」精神主義、エコロジー、その他の流行の熱狂的宗教の要素を混ぜ合わせたアメリカ自家製の仏教…道元からドライラマに至る…アジア仏教の諸伝承はいうならば輸入された「天然資源」に過ぎず、これがアメリカ精神産業によって種々な商品に作り上げられている。」

ビュルフェルト教授の以上の皮肉な表現は、まさに的を射ています。歴史の浅い米国では、仏教に限らず、何かと混ぜこぜにしがちです。そこから従来では考えられなかった新しいものを作り出すエネルギーもっており、仏教も同じ可能性があります。しかし、曹洞系禅センターは、指導者の筋が一応知れているだけでも100はあるそうですが、指導者不足も大きな要因となり、他の禅や仏教の教えとの混ぜ合わせが殆んどというのが実状です。

私はずっと「こうした傾向をなくさなくてはいけない。純粹の只管打坐をアメリカに伝えるのが自分の使命」だと考えていました。しかし、つい最近「そんなことをするには禅センターの数があまりにも多く、これからも無数に増えていくだろう。ほっておくより仕方がない」と考えるようになりました。あちこちから指導を頼まれても応じきれないのが現状で、若い人がアメリカに来るつもりなら、至る所に可能性があります。ただし、経済的な保証はありません。

無数の中からアメリカの道元禅師が現れれば、それが日本の道元禅師の教えと違っていても仕方ないでしょう。「無所得、無所悟の坐禅をそういう商品の一つに仕立て上げうるかどうか…おそらく出来ないでしょう。これは悲観論ではありません。日本仏教の中でも、それは出来なかったのだと私は考えています。出来なくても、只管打坐は少数の人々によって綿々と受け継がれて来たのです。」奥村師のこの文を読んだ時はショックでした。しかし、これは全く正しいと思います。私の禅センターが大きくならないのも当然のことだと納得がきました。私も綿々と受け継ぐ少数の一人に仲間入りさせてもらえれば十分です。

4. 平等主義

ビュルフェルト教授曰く「精神生活においてはなん人も同等のプレーヤーであると想定する傾向。アメリカには権威に抵抗し、階層的制度を憤るという、より深い文化伝承がある。」

奥村師曰く「僧侶と在家の関係もヒエラルキーとしての上下の関係ではなく、きちんとした、指導者としての訓練を受けた専門職とそのクライアントという風になってくると思います…面授嗣法ということがどのように考えられるのか、私自身見通しが立ちません。中国や日本のように、強固な家族制度が、社会の基本的な構成要素であった文化の中で形成された疑似家族的な師匠と徒弟の関係が、家族制度が崩壊しつつあるアメリカの社会で、社会的な認知を受けることはまず無いでしょう。」「現在多くの禅センターの指導者は女性です。男性が女性から得度を受け、嗣法するというのも出てくるでしょう。」サンフランシスコ禅センターの現堂頭は二人とも女性で、そのご主人たちも僧侶、堂頭就任祝いのスピーチをご主人たちがなさったと、奥村師は驚いています。

ただ、一部のアメリカ人僧侶の権威及び階層的制度に対する志向の強さに驚かされることがよくあります。

私はメンバーに"Tozen"と呼ばせています。そんなことをしたら、皆お前を尊敬しなくなるからよした方がいいと忠告する日本人もいました。今のところ僧侶としての敬意は払われていますが、それも"強者"に憧れたり頼りたがるアメリカ人の性格の一面のお陰かもしれません。

5. 行動主義

ビュルフェルト教授「(アメリカ人仏教徒は)信仰の体系としてよりも、むしろ実践すべきものとして仏教を考える…教団の教義と儀礼にはほとんど愛着



熱心に坐禅に取り組むメンバー

をもたないかもしれない…アメリカの在家者は僧侶のみに瞑想を任せることに満足していない。自らが精神的訓練に従事することを望んでいる…彼らが期待する宗教とは、自身の個人的な問題だけでなく、戦争、社会的不正義、環境破壊等の世界の問題を解決する宗教である。彼らは、宗教を精神的（または時に物質的）進歩のために用いる。そして、その結果によって、その宗教の価値を判断するのである。」

奥村師「ビュルフェルト教授は、参加型仏教 (Participatory Buddhism) を提唱して居られるのですが、アメリカでは、もう一つ"参加する仏教"と訳すことが出来る言葉が使われています。 Engaged Buddhismです。この言葉は、社会的活動に参加をする仏教という意味で使われます。社会で問題になっていること、戦争、暴力、人種差別、性差別、社会的不正、環境問題、福祉活動などに積極的に取り組んでいこうという活動です。」ホームレス救済事業、ホスピスに従事するゼン・センターもあります。

私がアメリカの仏教を考える場合に一番強く感じるのが、この参加型仏教です。これは基督教の影響が大だと思えます。奥村師は「多くの人々が、仏教徒を自認し、現に仏教寺院の檀家でありながら、仏教の教えの本質を知らないし、それを自分の生き方のバックボーンとして実践することもほとんどありません。このような日本仏教の現状に対して危機感を持っている人があまり多くはないという事実が最も危機的なことだと思います」と述べています。坐禅に限らず、写経や御詠歌も参加型の仏教といえるでしょう。しかし、檀家一般はもちろん、写経や御詠歌を習う人たちでも、表面的な勉強はさておき「自分の生き方のバックボーンとして実践する」ところまで仏教や禅を学び、修行する人たちが、日本にはどれだけいるのでしょうか。参加型仏教こそ、仏教の大先輩国、日本が、途上国であるアメリカから学ばなくてはいけない最大の点だと愚考いたします。

なお、教授の言に反して、儀式・法要に興味を持



アンカレッジ禅センター内



アンカレッジの町並み

メンバーは大勢います。また、ゼン・センターのメンバーの種類について述べた際に言い忘れましたが、政治的には、リベラル（進歩派）が断然多いようです。

ビュルフェルト教授がアメリカ仏教の特徴として挙げた5つの傾向は以上ですが、もう少し私の考えを付け加えさせていただきます。

アメリカ人は緻密なことが苦手で、大雑把なところがあります。法要での堂行や維那のやり方を細かく教えると、一旦は出来ますが、数日から数週間後には必ず元の自己流に戻ってしまいます。奥村師がサンフランシスコ禅センター堂頭の晋山式の進退ならしに同席した時のことを記しています。「晋山式の少し前から、創立者のご子息鈴木包一老師がこれにて、進退ならしの時には、元堂頭の天真・アンダーソン師が指導しているのに立ち会って居られた。"大筋であっていれば、細かいところは、その場の状況で変わってもいいんですよ。"と言われて、要所要所でアドバイスをされるだけで、静かに見守って居られた。しかし、当日の式は、安下所からの行列、山門法語、各寮での献香、祝国開堂、問答と、日本で行われている晋山式をほぼ忠実に受け継いだかたちであった。本堂は立錐の余地がないほどにいっぱい、入りきれない人々のために、食堂におかれたテレビでも式の様子が見られるようにしてある。」法式や身体作法等に極端に気を使う日本との、余りにも大きな違いに驚かされます。

最後に、もう一つ。最近のイスラム社会は西欧文明の侵入に警戒感、危機感を抱いているようです。日本も西欧文明の輸入とともに多くの古き良き伝統が破壊されたので、その気持ちは分かりますが、当然、西欧文明にも学ぶべき点が多々あります。自由平等で開かれた、話し合いの社会であり、弱者、少数派の権利も尊重されるという点は、その最たるも

のだと思います。行き過ぎた権利の主張に陥る危険もありますが、方向性としては正しいでしょう。アメリカからみると、日本は社会全体が規則で締め付けられ、上下の関係で押さえつけられている閉鎖社会と映ります。アメリカにもそうした矛盾はあり、イラクで虐待事件を起こしたりもしていますが、常にそれを訂正しようという反作用も働きます。

歴史的な流れとして、日本や世界全体が開かれた方向に向かうのは避けられないでしょう。宗教団体は伝統を守る必要があるとはいえ、宗門は先頭に立って閉鎖性を打ち破って欲しいと願うのは、米国在住僧侶の思い上がりでしょうか。

自分の修行不足を棚に上げて、勝手なことばかり並べ立てて申し訳ありません。ただ、日本にいただけでは見られなかった、経験できなかったと思われる世界を見たり経験したりし、日本を客観的に見ることもでき、本当に有難いことでした。今の若い人たちにもぜひ海外へ出かけ、見聞を広めていただきたいと思います。国際布教師になりたいという若い人も時々いるけれど、報酬の低さが障害になっていると聞きます。確かに収入は日本と比べたら少ないかもしれませんが、外国で生活する価値の一つは"金で買えない苦勞が只で買える"ことです。買う金がないだけだろうと言われれば、一言もありませんが。

"可愛い子には旅をさせろ"の言葉通り、苦勞は多いほどよく、若い時の苦勞が肥やしになり、年を取ってからの人生に役立つのだと思います。私も人生の終わりに近づき、最高の時を過ごさせていただき、心から有難いと思っております。とはいえ、世界には悩み、苦しんでいる人たちが満ち満ちており、僧侶の私がただ現状に感謝しているだけでは済みません。釈尊、道元禅師の教えを少しでも多くの人に知ってもらおう、今後とも私なりに努めていきたいと思っております。

以上、非常に限られた体験からの独断と偏見に基づいた、拙い報告で恐縮です。私のような至らぬ者をここまで支え、導いて下さった多くの方々に、衷心より感謝申し上げます。ご静聴、有難うございました。



秋山老師

両大本山SZ | 講演会アンケート結果

両大本山 168名中136名の回答（回答率81.0%）

■今日の講演会は

1. 大変興味深かった。 : 20名 (14.7%)
2. 興味が沸いた。 : 92名 (67.6%)
3. 興味が沸かなかった。 : 21名 (15.4%)
4. 関心がない。 : 3名 (2.2%)

■国際布教は、あなたにとって・・・

1. 是非、国際布教師として海外に出たい。
: 5名 (3.7%)
2. 機会があれば、海外に出てみたい。
: 80名 (58.8%)
3. 海外への赴任はできないが、活動への興味はある。
: 40名 (29.4%)
4. 全く興味が沸かない。 : 9名 (6.6%)
5. 回答なし : 2名 (1.5%)

■講演会の感想

アンケート用紙に氏名を記入して下さった方全員の感想を原文のまま掲載しました。（順不同）

- * 死への考え方、子供への説き方の部分が考えさせられた。（島根県：永見宏樹 5年目）
- * 海外での禅の実状を知れて良かった。（岩手県：村井弘典 3年目）
- * 国際布教師の現状を見たり、決めたりする機関、日本で言うお師家さんの様なものが必要ではないか。もしあるのであれば、その機関に疑問を感じた。国際布教師が宗祖の教えを正しく伝えているのか疑問である。（青森県：山口龍堂 3年目）
- * 海外での仏教は移民のためとして普及したのは事実だと思う。これからは新たに仏教を禅を信仰しようとしている人たちのための活動が必要だと思う。死生観、食生活など様々な考え方がある中で、どのように禅的思想を教えているのか話してほしかった。（岩手県：佐々木 2年目）
- * アメリカと日本での施主への対応、施主からのお寺への思いが少し違う気がした。しかし、これからの日本の仏教へ、アメリカでのことを取り入れたりして、もう少し施主のお寺離れをなくすることができる気がした。アメリカや海外での布教をもっと日本の寺院へ広めるべきだと思った。（静岡県：西垣美延 2年目）
- * 日本の仏教とアメリカの仏教は違う宗教といってもいいのかもしれない。（福島県：佐藤泰典 2年目）
- * アメリカと日本の曹洞宗の違いがよく分かりました。（神奈川県：山崎茂幸 2年目）

* アメリカの禅に対する考え方、アメリカ的な合理性に基づく大筋を大切にするという大きなものの見方は日本ではなかなか気が付かないことであると思いました。（青森県：松原 2年目）

* 仏教がインド、中国、チベット、朝鮮、日本へと伝わるにつれて、その土地独特の特徴を持っていたのと同じように、やはりアメリカでも、アメリカ独特の仏教ができています。特にキリスト教の影響を受けているという点が印象に残った。全く考え方が違うキリスト教が仏教、禅にどう影響するのかもう少し聞いてみたかった。またアメリカ仏教は日本仏教で将来起こりうる問題を先取りしているという言葉が印象に残った。（石川県：酒井孝雅 2年目）

* 曹洞宗の行儀見習いが大嫌いですが、老師のような方もいて笑えました。法に東西はないので、本当の法が西洋の方々に伝わるように自分も法を掴んだ後、海外布教に出たいです。（東京都：斉藤明慧 1年目）

* アメリカ人は「平等」を尊重するとおっしゃいましたが、それは「自由」であることと同じ意味なのでしょうか？宗教に対して自由なののでしょうか？仏教、特に禅は実践的な修行方法ですが、それが受け入れやすかったのでしょうか？（長崎県：村田元徳 1年目）

* 自己の思想的変遷から渡米。縁起により禅に出会い、出家得度。海外布教活動へと自己の仏道修行を探究されていく姿は、絶対的価値観を見失った現代の若者に一筋の光明を示されていると思います。できれば、思想的変遷時期をより詳しくお話しいただいて、どのようにして禅へ己を高めていかれたのか示していただければありがたい。（静岡県：馬場博峰 1年目）

* アメリカにおける禅の特徴やそれに参加する人たちについてもっと詳しく掘り下げて欲しかったです。アメリカ禅は師と徒弟の関係が平等だというのはうらやましいと思います。永平寺では新到和尚さんは高僧和尚さんに仏教についての質問さえ憚らなければならないような関係です。（愛知県：鶴子龍司 1年目）

* アメリカと日本との間にある文化の違いによっての海外布教の大変さがよく伝わってきました。実際に海外の方で禅を学ばれている方々との交流ができればと思います。（長崎県：浅岡俊孝 1年目）

* ロサンゼルス禅センターなどに数名知っているアメリカ人がいるので興味ある話でした。（宮城県：村田真隆 1年目）

* 海外にある禅センターということで、その土地、風土に合った禅の修行道場として修行を行っている。やはり、今という実状、今、現在の環境を海外の禅センターでは取り組んで行われている。今の永平寺ももっと現状や周囲の環境を取り込んで、現状に合った修行道場にしていった方が良いのではないかと考えさせ

- られた。(愛知県：鶴見尚道 1年目)
- * 海外での布教ということは大変苦労があるんだなと思った。(埼玉県：大河原隆道 1年目)
 - * 実体験を聞くことができて、大変興味深かった。(福島県：佐藤俊弘 1年目)
 - * 「お金では買えない苦労が買える」と言っていた秋山先生が印象的だった。秋山先生の活動を聞いて興味が少し沸いてきました。今の我々の禅との違いがあるとはいえ、SZIの方々には、もっと布教活動を続けてほしいと思いました。(静岡県：磯田和明 1年目)
 - * 日本の私たちにとって普通に感じる寺院の関係も講師の先生から見ると閉鎖的と感じ、変えていくべきものだと捉えられているのだなと感じた。私としては伝統は守れるものは残していきたいようにも感じます。(岐阜県：逸見智光 1年目)
 - * 個人的な家族の話が聞けて別の意味で面白かった。世界での布教の現状が少しでも聞けて良かった。具体的な活動内容がもっと聞きたい。(島根県：植田星覚 1年目)
 - * 海外での「禅」の在り方を知ることが出来た。アメリカの人が禅に対して興味があるというのは日本人も見習うべきでしょう。只「無」だの言っても海外では付随するものが重要？ 海外布教に興味が増えました。(山形県：奥山大哲 1年目)
 - * 「アメリカの禅」ということでもっと日本の禅とアメリカの禅の違いを期待していたが、大半が講師さんの歩んだ道であったので少し期待外れであった。アメリカにおいても禅の本質が崩れず、布教されていれば良いと思った。海外においての布教は個人的にするとすれば本当に難しいことと思った。もし英語ができ、何かしらの団体があれば海外においての布教もしてみたい。キリスト教の中で禅を広めることは至難の業であると思いました。(北海道：島崎元輝 1年目)
 - * 自分自身、国際布教というものに視点をおき、関心がでたように思います。もっと詳しく勉強したい気持ちになった。(熊本県：荒木孝尚 1年目)
 - * 国際布教師というものを知り、興味深くなりました。このような講演会にまた出席したいです。(群馬県：新井規弘 1年目)
 - * アメリカでの布教は、宗門の知識を十分にもっていないと思いますので、非常に難しいことであると感じました。(山梨県：山本義昌 1年目)
 - * 他国での活動は自国での活動と比較しても言葉等の問題も含めて難しさが大きいと感じた。他民族との交流等は素晴らしいことだと思う。(山形県：五十嵐徹通 1年目)
 - * 海外で行われている布教には興味がありましたが、紙面でしか読むことがなかったので講演会は良い機会でした。今後の日本での曹洞宗の行く末を垣間見るような気分でした。(北海道：泉岡龍太 1年目)
 - * 大変興味深い内容でした。私自身、教化・布教に関心があり、その一つの方向性として国際布教も視野に入れることができました。ボーダーレスな現代社会において異文化交流は不可欠ですが、宗教界においても同様だと実感しました。(愛知県：山塚彰裕 1年目)
 - * 自分的には話の内容がよく理解できなかった。(愛媛県：高木恒人 1年目)
 - * 今回の講演を聞いて、国際布教に興味をもつことができた。(秋田県：堀井英和 1年目)
 - * 海外での布教にあたって言葉や習慣も違う場所で布教することは、大変感心しました。(岩手県：田山博道 1年目)
 - * 自分は外へ外へ布教し宗門のすそを広げるのも大切だと思うが、もっと内の日本での活動もしっかり見直していくことも大切だと思う。(愛知県：栽松大寧 1年目)
 - * アメリカでの活動内容、どのような人たちが禅をしているのかというのは分かったが、話の内容が広すぎて、一部のことしか理解できなかった。(青森県：高山泰信 1年目)
 - * 日本よりイスラム教やキリスト教の信仰が強いと思われるアメリカでの考え方やものの捉え方が日本人とは違っているところが多いものだなと思った。その中で、特に坐禅の捉え方が印象に残った。坐禅は自己と向き合える時間であると考えるので、間違いではなく、坐禅の意味の一つであると考えられる。広い視野で仏教を学んでいきたいと思った。(栃木県：山端信祐 1年目)
 - * 日本では規則に当てはめたような宗教である仏教ですが、アメリカでは身体とかより心の宗教であるということであり、私もそう思いました。私自身、本山で修行をしているうちに進退作法を気にしすぎてきた面があり、大切な心を忘れるところでした。(秋田県：櫻田太真 1年目)
 - * 老師本人の体験を基にした貴重なお話が伺えました。海外での布教活動がいかに大変か、またやりがいのある仕事かが伝わってきました。(埼玉県：黒田雅童)
 - * 「海外で布教することの苦労。これができることがありがたい」という言葉から、SZIの仕事のやりがいが伝わってきて自分もやってみたくなった。(静岡県：児玉龍典)
 - * 初めて国際布教の話が聞けて、大変うれしく思いました。英語など何もできませんが、外国へ行く機会があれば出たいと思います。(静岡県：山田英一)
 - * 実際に海外での布教活動の実体験が聞けて良かった。アメリカの禅の五つの特徴がとても興味があり、感じる部分があった。(秋田県：藤原晃徳)
 - * 活動しているところが映されたビデオや写真を見てみたいです。(花山智憲)

特集3／南アメリカ開教100周年

伯国イビラスー禅光寺創立30周年慶讃式典・記念事業

～エスピリット・サント州三権の長が勢揃い～

瑞応寺専門僧堂代表 加藤孝正（静岡県 永明寺住職）



ショッピングセンター内で写真展を開催

去る8月27日から31日にかけてイビラスー禅光寺（主任国際布教師：ビッチ・大樹師）創立30周年を祝って様々な催し物があった。私は瑞応寺を代表し、青山嶺雲老師は永平寺七十七世故丹羽簾芳禪師法類を代表しての参加であった。たまたまブラジル旅行中の静岡大正寺徒弟小川順広師の参加は有り難かった。すべての行事に参加した日本人は以上の3名。後半の30、31日には、ペルーでの南米開教100周年行事を終えた南米総監三好晃一老師と永平寺副監院松永然道老師夫妻が強行軍の中、合流した。主な祝賀行事は七つあった。以下は私の参加し見聞した諸行事の記録である。

1. 8月27日 午後5時半

《禅光寺創立30周年慶写真展のテープカット》

州都ヴィトリアの州議会議事堂前に位置する州内最大のショッピングセンターにて、禅光寺の今昔、歴史と現在の諸活動が写真パネルを通して一般人に紹介されている。一角には本格的な日本庭園も作られている。2週間の展示会だそうだが、さっそく多くの買い物客が足を止め写真に見入っていた。

2. 8月27日 午後6時半より

《州議会による禅光寺創立30周年記念式典》

議事堂内セレモニー・ホールにて提案議員の司会により以下の次第で進んだ。①ブラジル国家斉唱、エスピリット・サント州歌斉唱 ②州議会職員合唱団による祝いの歌3曲 ③州議会議長代理挨拶（議

長は所用により欠席）④DVD映像による禅光寺の紹介 ⑤禅光寺創立30周年記念式典提案議員による挨拶 ⑥州観光局長挨拶 ⑦州教育文化局長挨拶 ⑧加藤挨拶 ⑨ビッチ・大樹師挨拶 ⑩表彰状授与（受賞12：ビッチ・大樹師、青山老師、加藤、元州知事、ジョン・ネイバ市長、ツパロン製鉄社長等）

⑪祝電披露（ブラジル全土の各界著名人より多数、日本からは瑞応寺と齊藤芳寛老師からの祝電があった）⑫コンゴ演奏（30人の子供達によるブラジル民族音楽演奏3曲）⑬式典終了、議事堂内別会場にて立食パーティー・記念出版物の即売会と夜10時頃まで続いた。参列者は200人以上、ホールは立錫の余地がないほどの人々で埋まった。中にはブラジルユネスコ代表等もあり大樹師にとっては驚きの連続であった。

3. 8月28日 午後8時

《州教育文化局主催による禅光寺創立30周年祝賀音楽会》

地元イビラスー市街地の大通りに仮設舞台が設けられ、州都ヴィトリアのオーケストラ30人による生演奏。有名な歌手が加わり数曲を熱唱。オーケストラが後片付けする間、ビッチ・大樹師挨拶、私と青山老師も一緒に舞台上に立つ。挨拶後、我々は疲れていたのも早々に退場。最後まで参加した友人の話によると、その後有名な地元ロックバンド3組による生演奏があり深夜2時頃まで続いたとか。この音楽会は無料であり、イビラスーの人口約一万人の内四千人以上が参加、音楽に酔い、踊ったそうである。



州議会議事堂内での記念式典

4. 8月30日 午後4時

《禅光寺創立30周年慶讃法要》

禅光寺本堂にて、ブラジル各地より参集した得度の弟子等30余名により、青山嶺雲老師を導師として厳守。差定は①殿鐘三会②七下鐘導師上殿③拈香法語④普同三拝⑤献茶湯⑥般若心経⑦回向⑧普同三拝⑨導師退堂⑩参加者一同焼香であった。法要の準備をしていて気になったことは、草創開山である拙道良範大和尚と当寺開山永平七十七世瑞岳簾芳禅師の御位牌が未だ備えられていないことである。

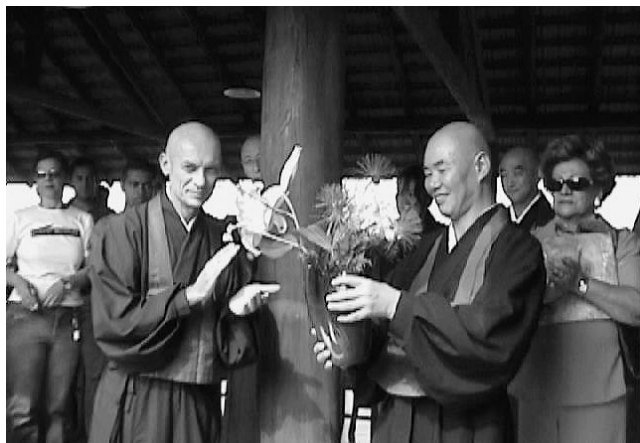
法要後、ブラジル最大のテレビ局GLOBEで毎週土曜日午後1時45分から2時15分に放送されている『movemento』の取材インタビューがある。これを大樹師と私が受ける。

翌日午前、ブラジルで2番目に大きなテレビ局GAZETTAの取材がある。これには大樹師と三好総監がインタビューに応じた。

5. 8月31日 午後1時

《記念昼食会》 於禅光寺庫院

今回の禅光寺創立30周年記念行事の最終日はヘリコプターの爆音で始まった。エスピリット・サント州知事PAULO HARTUN夫妻の来山である。広い境内地を大樹師の案内でまず散策。庫院に入り展待を受け、その後精進料理の昼食会である。同席したのは、日本側では松永・青山・三好の3老師と私、ブラジル側は州知事夫妻・州議会議長・州裁判所長官・近隣の市長・地元選出の国会議員・州議會議員若干名・州教育文化局長・州観光局長・州農業局長・州環境局長・ツバロン製鉄所代表・アラクルスセルロース代表・リオドセ代表等であった。夫婦同伴者や各出席者の秘書、SP等も大勢いるため、広い庫院も狭く感じられる。私は誰が誰だか認識するのに苦労した。和やかな雰囲気の中、予定行事が詰まっているにもかかわらずなかなか終わらないため、三好総監が気転を利かし、大樹師と料理を用意した大衆の労苦をねぎらう挨拶をし、記念昼食会は無事終了した。



榑崎一光記念イベントセンターにて

6. 8月31日 午後2時半

《榑崎一光記念イベントセンター開所式》

石畳の参道を3キロほど下ったところにある車止めの手前に新しく道が造成され、その奥の高台に榑崎一光記念イベントセンターは位置する。当初、オーディトリウム、セミナーハウスなどと聞いていたため、どんな施設だろうと訝っていたが、多目的ホールと呼んだ方がよさそうである。150人規模収容のホールと100人規模収容のホールが並立して建ち、コの字を繋ぐ場所が見晴台になっている。この見晴台には100人位が一度に食事を摂れるスペースがある。ここでの開所式は瑞応寺を代表した私の御礼挨拶で始まり、州知事と関係者一同によるプレートの除幕式、センター内見学と続いた。大ホールの正面には故榑崎一光老師の大きな写真が掲げられてあった。

この榑崎センターの背後には既に9軒の小さな家が新築されてある。大樹師によると、このバンガロー形式の小さな家は遠くから参禅に来る人々が家族同伴の時に使ってもらう、との由。このホールはバンガローに滞在する参禅者家族の交流の場として使ってもよいし、最近寺の伽藍では収容しきれない多人数の研修申込が多く、その要望に応えた施設でもある、との説明であった。ここには広い駐車場があり、境内地で収容しきれない車の補完駐車場としても利用できる。この複合施設は毎年宗務庁から国際布教師に送られる衣資と摂心参加者よりの布施を貯金し建設することができたようだ。

7. 8月31日 午後3時半

《丹羽簾芳禅師記念公園開園式》

BR101（ブラジルで最も長く重要な海沿いの幹線国道）に沿ったこの土地4haは州知事の肝いりで大会社3社が禅光寺のために購入してくれたものである。ここに高さ10m程の鉄製の赤い鳥居が建立され公園入口になった。俗界と聖界を分ける巨大な鳥居は、禅光寺参道入口の目印をも兼ねている。夜になると鳥居はライトアップされ、道路を走るドライバーの眼に否が応でも写るように設計されている。新名所の誕生である。一角には白砂を敷き詰めた大きな日本庭園も設けられている。

この開園式は、近隣より集まった数百人の人々の見守る中、鳥居に取り付けられたテープカットで始まった。州知事・大樹師・青山老師・松永老師・三好総監 他、関係者一人一人の名が呼称され一斉に行なう。中に少し移動、丹羽簾芳禅師記念公園のプレート除幕式である。丹羽禅師も大寂靜中きっと破顔微笑されていることであろう。次に青空の下にしつらえられたテントの中で契約書調印式があった。契約は州政府と禅光寺の間のもので2種類ある。一つはこの地区を州政府の自然環境遺産とするものであり、他は従来ラジオ無線による電話で不自由していた禅光寺に光回線を繋ぐ、というものである。次はテントの中での挨拶。巨大なスピーカーを通してまず丹



丹羽簾芳禅師記念公園に立つ大鳥居

羽禅師の遺弟である青山老師の挨拶、三好南米総監の挨拶、大本山永平寺を代表した松永副監院の挨拶と続いた。そして、州議会議員代表挨拶、最後に州知事の熱のこもった挨拶があり、すべての行事は終了した。広大な緑の芝生、一角の白い砂庭、真っ青に晴れ渡る空の下に建つ真紅の鳥居、絵になる構図である。

大樹師の話では、この公園建設は急遽決まり、禅光寺30周年記念事業に組込まれたようである。近年、禅光寺が有名になり、一般人がブラジル各地からこの田舎町に来るようになった。この来訪者増加と国道沿いという好立地を当て込んで、不徳の業者が禅光寺入口に当たるこの土地を購入、モーター建設を計画し始めたそうである。それを阻止するために大樹師はマスコミやあらゆる機会を利用してモーター建設反対運動を展開。過去3年間、裁判までして闘ってきたそうである。この闘いは州知事が介入することによって急転直下解決することになる。州知事が禅光寺に関係深い製紙会社アラクルース・セルロース、製鉄会社ツバロン、鉱山会社リオドセの3社に話を持ち掛け、この土地購入の資金を捻出してもらい、公園整備の援助もしてもらった、ということらしい。資金援助をしてくれた会社はいずれも各業界で南米最大の会社である。ツバロンとリオドセは日本との関係が深く、日伯友好のシンボルとして協力してくれたようだ。こうした事情を知ると州知事の演説に一段と熱が入るのがよくわかる。州知事本人がこの公園建設に深く関わっているのである。

常識的に考えて、民主主義国家においてこれほどまでに州知事はじめ州議会議員・裁判所長官という三権の長がそろって一仏教寺院のために好意的に協力してくれることなどありえない話だ、と思う。まして、ブラジルは世界最大のカトリック国である。きっとこれがユネスコ《ムリキ賞》の威力なのであろう。大樹師とそのグループが一昨年受賞したユネスコ《ムリキ賞》は、思わぬところで地元住民の誇りとなり、その威力を発揮しているのである。(ユネ

スコ《ムリキ賞》受賞に関しては前回報告済み)

最後に醜聞を記しておく。このような記録は公開したくないが、またぞろ変な尾ひれがついて宗門内で広まる怖れがあるので敢えて記しておく。

8月27日、上記のようにエスピリット・サント州議会では禅光寺創立30周年記念式典があった。その直前、大樹師を誹謗・中傷する手紙が州議会議員全員に届いたそうである。その内容は、過去に何回もあったような大樹師がいかに堕落しているかを記したものだそうだが、せっかくの慶事に水を差す、実に悪質な行為である。手紙の差出し人は、禅光寺草創当時大樹師と一緒に修行した仲間らしい。人の足を引っ張る労力があるなら、その力を良い方向での切磋琢磨に利用出来ないものだろうか。実に残念である。【一本の木が大樹になればなるほど、木陰も大きくなる】という比喻で我々は大樹師を慰めた。

最近エスピリット・サント州最古で最大の発行部数を誇る新聞『ガゼッタ』が「エスピリット・サント州で最も大切なものは何か？」との世論調査をしたそうである。その結果、禅光寺は最も大切な5つに選ばれたそう。5つの内容は自然物が3つ、人工物は2つである。自然物とはグアラパリ海岸、青い岩山(PEDRA AZUL)、神父と修道女の姿をした岩山(O FRADE E A FREIRA)の3つである。人工物は禅光寺とペーニャ教会(CONVENTO DA PENHA)だったそう。ペーニャ教会とは州都ヴィトリアを訪れる観光客が必ず行くという山の頂上にあるカトリックの教会である。450年の歴史を持ちヴィトリアの顔の一つであるこのペーニャ教会に伍して、僅か30年の歴史しかない禅光寺の名前が挙げられたことは驚きの何物でもない。大樹さん！人々は正当に評価しておりますよ！



丹羽簾芳禅師記念公園記念碑

特集3／南アメリカ開教100周年

南アメリカ開教100周年記念行事に参加して

静岡県 養雲寺副住職 青野貴芳



ペルーにおける布教の歴史は、1903年の管長辞令をもって開始された。したがって、2003年が開教100周年に当たるが、100周年記念行事は2004年8月24日から29日にかけて挙行された。執り行われた行事は、摂心会（24日～27日）、日系人墓地巡回慰霊法要（24日～27日）、100周年記念法要（28、29日）である。

諸行事の開催に先立ち、8月初頭より、リマ市新市街のサン・イシドロ地区に位置するニュー・コルパック・ホテルに事務局が設けられ、宗務庁国際課の古溪師、北米の南原師が諸準備に当たられた。

— 摂心会 —

今回の摂心会の参加者は、僧侶11名、在家13名の計24名であった。堂長を三好晃一南米総監老師に、講師を宮川敬學宗務庁教化部長老師におつとめいただいた。その他の僧侶は、ブラジル、アルゼンチン、北米等からの参加である。皆様、日本での安居経験をお持ちで、筆者にとって、日本語が通じるのは有難い限りである。

開催地は、リマ市郊外（市中心部より40キロ程）にある、カーサ・アティンチュという宿泊施設（日本でいうとペンションに相当すると思われる）であった。約1ヘクタールの敷地内に3棟の建物を擁するその施設は、豊かな緑と鮮やかな花の彩りに溢れるコロニアル風の別荘といった趣である。近くには、パチャカマックという有名な遺跡があるが、ここはインカ文明を含む四つの文明が変遷したところである。開催地は、パチャカマックに近接する村を抜けた山の手位置しており、かつては広大な農園であったという。カーサ・アティンチュは、その敷地の一部で、現在はコンサルタント会社が所有している。

さて、我々僧侶組は、摂心開始日前日の23日に、

ニュー・コルパックに集合、14時に摂心会場に向けて出発した。

アメリカ大陸を縦貫するパン・アメリカン・ハイウェイを南下すること約30分、道が空いていたこともあり、早々に現地到着。摂心といえば僧堂の枯淡な雰囲気しか思い浮かばない筆者にとっては、まず、このリゾート風の会場に驚かされた。しかし、他の外国人僧侶方に聞いたところ、外国で坐禅のワークショップを行うときは、このような人里離れた宿泊施設を借り切ることが多いということであった。

到着後、部屋割りを終え、会場準備にとりかかる。敷地内のサロンに、聖僧像を安置し、カーペットの上に坐褥と坐蒲を並べると、即席ながら立派な坐禅堂が出来上がった。

明るく24日、朝9時から一般参加者が三々五々到着。日系人が多く参加するのだろうと思っていたが、参加者の顔ぶれを見るとそうではないようだ。ペルー人といえば、人種的にはハイブリッドな方が多いようであるが、今回の参加者に日系人はいないようである。また、ペルー人の他に、コロンビアからの参加者も一人おられた。三年程前から、南米総監部によって、年に一回ペルーで坐禅指導等が行われており、今回のメンバーはそのときの参加者が中心となっているようである。

これは、私としては驚くべき事態であった。正直なところ、南米の仏教というのは、その歴史的経緯からしても、「日系人のための仏教」が展開しているのであると予想していた。つまり、日本的な文化や情操に馴化された、先祖供養を中心とする民族宗教的な仏教であって、戒・定・慧を参究していく本格的な仏教ではないだろうということである。言い換えれば、日系人以外には開かれていない仏教に違いないと思っていたということである。また、リマ市内を散策したとき、果たして、このカトリック文化が根付いた地に、仏教の展開し得る余地はあるのだろうかと思っただけで疑問に思った。

しかし、アルゼンチンから参加されたリカルド道久師によると、どの国でも、仏教の展開する可能性は大いにあるということであった。師の活動しておられるアルゼンチンも、ペルーと同じくカトリックの国であるが、坐禅に関心を持って師の坐禅会に参加する人は相当人数いるようである。特に政情不安の多い国では、自己の探求に関心を持つ人も多いそうである。したがって、どちらかといえば内面を掘り下げていくことを特徴とする仏教は、民族・宗教の違いを乗り越えて普遍的にアピールするのであろう。

さて、初日のプログラムは、10時半のオリエンテー

ションからスタートした。このとき、配布物（経本等）の説明、プログラムの説明、三進退の説明等が行われた。

オリエンテーション後、11時半より開講式、中食をはさんで、午後は坐禅指導、行鉢指導が行われた。

夜からは、いよいよ坐禅が始まる。全期間を通して、坐禅中に宮川老師による提唱の時間が六回設けられていた。内容は、通仏教的な話から始まり、『弁道話』の解説に至るといふ壮大なスケールを持つものであった。また、提唱時には、参加者は、面壁したまま話を聞くのではなく、対坐してメモを取りながら聞くという形式が採られた。今回の参加者の中には、既に日常的に坐禅を行じている方、ヨーガの先生、独自に坐禅のワークショップを開いておられる方等いたのであるが、やはり、これまで、仏教の歴史や教学に触れる機会は少なかったと思われる。その点を配慮されて、講義形式に近い提唱スタイルを採られたのだと思う。また、今回通訳を務められた在家信者の相良士がまず理解できるように、言い回しに骨を折られたと宮川老師自身も言っておられたが、実に分かり易い提唱内容であった。何といっても、本質を損なうことなく平易に話をするということが、一番難しいことであろう。

翌日（25日）からは、わずか二日間であるが、フルタイムのメニューが始まった。朝5時半の振鈴から始まって夜9時の開枕に至るまで、休みなくメニューがこなされていく。全参加者が三班に分けられ、それぞれの公務（典座・台所清掃、維那・坐禅堂清掃、直堂・廊下清掃）を遂行していった。

ただ、今回の参加者は、初心者に近いということで、本格的な摂心ではなく、坐禅を中心とする仏教セミナーという趣が強かったように思う。そのため、差定も、エッセンスを残しつつ簡略化したり、坐禅以外のメニューも工夫されたものであった。例えば、三時課経は、三歸礼文→本尊上供→修証義（『修証義』全体を31節に分け、日付と同じ番号の節を読む）→先亡諸霊回向という簡にして要を得た形式がとられた。また、中食罷の最初の差定は、宮川老師による梅花指導であった。

梅花講習は、単にご詠歌の練習に止まらず、食事作法についての心得、梅花流の歴史等の話を交えつつ、「聖号」の練習を行った。宮川老師は、さすがに手慣れたもので、巧みにジョークを挟みながら、時には会場に置かれていたギターを手にとって、親切にご指導下さった。

夜坐の最後の一島は、坐禅と平行して、三好老師による独参が行われた。中の様子を窺い知ることはできなかったが、三好老師の柔らかなで気さくな雰囲気のためであろうか、予定時間をオーバーして随分長いこと独参が続いたようである。

夜坐の締め括りは、普勧坐禅儀看読。ローマ字表記の『普勧坐禅儀』が、参加者一同によって朗々と唱えられ、南半球の空に響き渡った。今、日本から遠く離れたこの地で高祖の遺訓が読まれているのか

と思うと、実に感無量であった。

夜坐罷には、在家得度者講習会が催された。最終日（27日）に在家得度式が行われることになるのだが、三好老師の指導により、そのための準備が行われた。在家得度者には、血脈書写の宿題が与えられ、少ない空き時間を利用して真剣に準備していた。

最終日は、日天作務のあと、在家得度式であった。今回は、参加者のうち5人が在家得度を受けた。10時半開式、本尊上供ののち、法に随って戒法と戒名が授与され、新たな仏弟子が誕生した。

全日程を終え、この日の中食は、「パチャマンカ」というこの地域の名物料理とビールで打ち上げとなった。パチャマンカというのは、地面に掘った穴に、肉・野菜・果物を入れ、蒸し焼きにした野趣溢れる料理である。そういえば、摂心期間中は、出される食事も菜食であり、たいへん有難いお心遣いをいただいた（ただ、少々量が多目であった）。

各自荷物も積み終わり、カーサ・アティンチクをあとにしようという段になったが、皆別れを惜しみあって、なかなか出発できない。日本人にしてみれば、少々しつこすぎるくらいの惜別の場面である。「まだ終わらないんですかねえ」と近くにいた外国人僧侶に訊いたところ、「なかなか終わらないですよ。ラティーノはこういうスタイルです」とのことであった。

確かに、期間中通して、在家参加者の方々は、特に時間を守るということに関しては、南米の人らしい大らかさを大いに発揮してくれた。また、通常の摂心のように、沈黙を守るということもなく、ティー・ブレイクも大いに楽しんでいただようである（今回は沈黙のルール自体設けなかった）。本格的な摂心を粛々とするには、まだまだ時間がかかるであろう。しかし、日本式のスタイルを遵守できたかどうかは、今回の場合、問題ではないだろう。宮川老師が、「まさかこの地球の裏側で、摂心をやって、応量器を展鉢できたなんて、まったく凄いことだ」としきりに言っておられたが、私も同感である。応量器展鉢は、諸法が展開していく様を模した象徴行為であると聞いたことがあるが、このペルーでは、今まさに仏法が花開き始めようとする場面であろう。ペルーの仏法の揺籃期に立ち会い、ダイナミックさに溢れるフロンティアの雰囲気満喫することができたことに対して、筆者は感謝の念しきりである。今後、ペルーの仏教がどのように展開していくのか、私の思量の外の事態であるが、老師方が仰られていたように、願わくは、今回の参加者を中心として益々発展していったほしいものである。

また、今回の参加者を見ていて思ったが、日本の仏教文化全体に対して関心があるのか、それとも、坐禅という部分にのみ関心があるのか、機会があれば尋ねてみたい点である。個人的には、坐禅の瞑想テクニックのみを学ぶのも大いに結構だと思うが、正しい坐禅を継続的にやっていくのは意外に難しいことだと思う。なぜなら、坐っているときのみならず、日常底の心術にも細心の注意を払っていくのが

坐禅であり、定期的に適切な指導を受けなければ、容易に横道に逸れてしまうであろうからである。恐らく、指導者なしでは99パーセント道を間違えるのではないか。そういった意味で、仏教文化全体を收容してしまえば、ある程度坐禅を生かす道筋も手に入れ易いとはいえよう。

— 日系人墓地巡回慰霊法要 —

摂心会に並行して、ペルー各所にある日系人墓地への巡回慰霊法要が営まれた。この法要には、現地の日系人のほか、北米等からの参拝団等も参加された。有田恵宗宗務総長老師が導師をお勤めになり、現地の方々からたいへん感謝されたとのことである。

— 100周年記念法要 —

法要前日の27日より、巡回法要組、摂心組、また、法要のお手伝いに日本から来てくださった方々等が合流し、準備に当たった。

100周年記念法要の会場となったのは、リマ市内にある日秘文化会館、及び慈恩寺である。日秘文化会館は、ペルーの日系人が日本の文化に触れることができるようにと、1981年に造られた施設である。

日秘文化会館で行われた法要は、「開拓移民並びに日系人物故者慰霊法要」「100周年慶祝法要」である。また、法要に先立ち、14時より「慈恩寺百年の歴史と日本人ペルー移民の歴史」と題するパネルディスカッションが行われた。

このとき、昨日までの摂心参加者も顔を見せてくださったが、なんと、法要中にご詠歌を披露してくださったとのことであった。ペルーで梅花指導が行われたのは、今年の6月22、23日と、昨日までの摂心中のみであるが、早くも大舞台である。日本でご詠歌をされている方々のことを考えると、ペルーのメンバーの年齢は随分若い。南米の人らしく、陽気に「聖号」を口ずさんでいらしかったが、ご詠歌のキャッチーなメロディーは、国境を越えて人々の心の琴線に触れるものがあるのだろう。

16時30分より、「禅のいぶき（スペイン語版）」が上映された。会場は、現地の方々、各国からの参拝団の方々等百数十名の参列者で埋まっていた。

続いて、17時より、開拓移民並びに日系人物故者慰霊法要が厳修された。導師は宮川老師であった。

次の法要に先立ち、献灯・献花が行われた。とりわけ、献灯は、法要参列者が百本の蠟燭をステージに並べたのだが、予想以上の演出効果を醸し出しており、厳かな雰囲気を作っていた。

献灯・献花のあと、100周年慶祝法要に移行。こちらの導師は有田老師におつとめいただいた。

法要終了後は、同じ会場で晩餐会となった。途中で、現地の音楽や踊り、また、日本の歌や踊り等の余興が披露され、最後は三好老師のご挨拶でお開きとなった。



南アメリカ開教100周年記念法要

翌29日、いよいよ一連の日程の最後を飾る慈恩寺における法要である。

会場となる慈恩寺は、リマ県南部のカニエテというところにある。リマ市からは、200キロほど南方に下ったところに位置する。摂心会場に向かったときと同じく、パン・アメリカン・ハイウェイをひたすら進む。

ペルーの沿岸部は、年間通してほとんど雨の降らない砂漠性の気候だという。リマ市街にいと、いわゆる都市という面貌をみるばかりで、砂漠だということが実感として分からなかった。しかし、こうして郊外に出てみると、ハイウェイの右手には太平洋、左手には、延々と砂山というか砂のうねりが続いている。砂漠というものを目にしたことはないのだが、この風景を砂漠というのであろうか。これほど「荒涼とした」という表現が似つかわしい光景は、かつて目にしたことがない。

今を去ること百年余、日系移民の方々も、希望を抱いて長い航海の途につき、その果てに目にしたのは、これと同じような景色だったのだろうか。一見、まさに不毛の大地である。実際、カニエテの日系移民の歴史は、凄絶な苦闘の連続であったという（ただ、これは気候のせいというより、人的な要因が大きいと聞いている。また、農耕用の灌水に関する不便さについては、今回不思議と耳にしなかったが、これは、単に私が聞かなかったというだけなのか、あるいは、アンデスの伏流水等が豊富なのか。また、沿岸部から40キロほど内陸に入れば、雨の降る気候になるそうだ）。

さて、慈恩寺とはどんなところなのかと思っていたが、日本の寺院とは感じが違うものの、こざっぱりとした印象である。門扉を入ってすぐに本堂の伽藍が位置しており、その奥に庫裏がある。また、庫裏と本堂に挟まれるような形で集会スペースといおうか広場がある。我々が朝9時頃到着したときには、すでに奥さん連中が集まっていて、庫裏の一階にある台所で料理の準備に取り掛かっておられた。聞いた話によると、慈恩寺では、年に二回（四回と言っていた人もいる）、大勢で集まって食事をするのだそう。

本堂内部は、正面の一段高くなったフローリング・スペースが大間及び内陣となっており、露地にはキ

リスト教教会のように椅子が並べられている。大間脇と須弥壇裏及び大間地下は納骨堂となっており、遺骨が所狭しと並べられていた。その様子は、日系移民の歴史を無言のうちに語っているかのようであった。日本の世情を表現する際、「宗教離れ」という言葉はよく用いられるが、確かに、特に若年層にあっては、「ご先祖様をお祀りする」といっても、あまり心に響かないように思われる。しかし、日本を離れてみると、却って日本人特有の宗教意識が先鋭的に喚起されるのであろう。ここの納骨堂に立ってみると、遺骨に対する信仰と、お寺が持つ人生最後の終着駅として役割を強烈に意識させられた。

法要の一般の参列者であるが、事前に200名程だと聞いていたが、現地に入ってから耳にした直近の情報では、日系人が各地からバス7台を連ねて参集し、何と400名が参列するという。我々は、ありったけの焼香用香炉を用意して、本番に備えた。

法要開始予定時刻の11時を過ぎて、日系人の方々が大挙して到着。慈恩寺本堂は、文字通り立錫の余地もない混みようとなった。

法要に先立って献茶式が行われ、日本からペルーに嫁がれたという女性が、茶道の作法に随ってお茶を点てられた。

第一座は「慈恩寺開山歴住諷経」、第二座は「孟蘭盆施食会」が厳修された。導師は、いずれも三好老師におつとめいただいた。

筆者としては、これほど盛り上がった法要は、かつて体験したことがなかった。また、参列者の方々に喜んでいただけたであろうということも、手に取るように分かった。正直なところ、これまでの一連の行事中は、かなりハードなスケジュールであった。しかし、この法要に参加して、「やってよかった！」と大いに満足することができた。

法要後は、参加者全員に食事が振る舞われた。料理の中には、かき揚げのようなものや、焼きうどんのようなものや、のり巻きもある。近くにいた方が、いくつかの料理について解説してくださったが、かき揚げ様のものは、沖縄料理が原型となっているそうである。また、焼うどんのような料理は、「スパ(と聞こえた)」というそうで、この汁なしのスパはカニエテ地方の名物なのだそうだ。ペルー料理一般についても、日本や中国の料理法や調味料が取り入れられているものも多いそうで、筆者の経験からいっても、ペルー料理は概して日本人好みの味付けである。

バイキング形式で料理を取ったあと、本堂の内外や庫裏前のスペース等各自思い思いの場所で食事をする。400人以上いるだけあって、賑やかなことこの上ない。

法要を終え、僧俗共に皆で膝をつき合わせて食事を楽しむということも、日本では年々少なくなっているのだろうが、ここペルーでは、まだまだ人々の大きな娯楽でありうるだろう。「ああ、かつては日本もこうだったんだな」その光景を目にして、懐かしさとともにそう思った。

しかし、法要を中心とするお寺のあり方は、ペルーでも日本でも、必要性はなくならないと思うが、ニーズは小さくなっていくであろう。筆者がこの日目にしたのは、古き良き時代の残照とでもいうべきものだ。「おらが村の和尚さん」という役どころが、地域社会の中で確固とした機能を持っていた時代の話だ。もはや、法要で綺麗な装束を纏ったからといって、「ああ、今日のために、おっさんが一張羅の衣をつけてくれた」と素朴に感動していただける時代ではない。「下劣あるをもって宝几珍御」というから、荘厳に相当する部分は、ユーザーに対する効果を目的とするものであろう。したがって、特に檀信徒向けの法要は、檀信徒に感動を与えることがなければ大半の意味を失うと思われる。今日、人々の耳目を楽しませるものは無数にあるのであって、仏教の荘厳がかつてほど人々引きつけるとは思えないのである。実際、我々僧侶は法要の妙味や有難さを重々に承知しているわけであるが、それは、一般の方々の法要に対する認識とは大いに乖離しているといって差し支えないであろう。

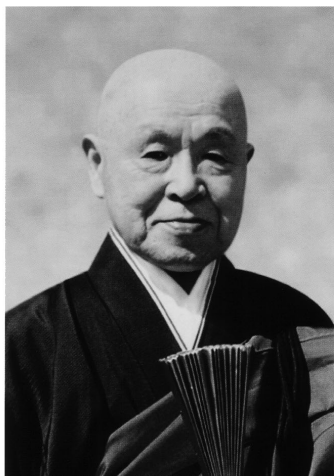
そういった意味で、今回の100周年記念行事の中に摂心が盛り込まれたのは、最も意義深いことではなかったかと思う。なんとなれば、布教ということを考えるのであれば、現地の方が継続的に関わっていただけるような道筋を作ることに重点を置くべきであると思われるからである。単に法要をするだけであれば、それは一過性のデモンストレーションで終わってしまうであろう。また、坐禅を中心とする布教の方が、現代人のニーズに合致していると思われる。したがって、三年前からの坐禅指導を布石とし、今回の摂心を機にペルーの参禅者の結束が強化されるなら、まさに100周年記念行事はペルーにおける仏法興隆の奇貨となり得ると思う。今後ますますペルーの人たちに坐禅が浸透し、一華五葉の春が巡り来ることを祈念している。

最後に、今回の100周年記念行事は、多くの方の尽力によって無事円成したわけであるが、特に、早い時期から事務局の運営に携わってくださった古溪師と南原師には、心からお疲れ様でしたと申し述べ、閉筆させていただく。



法要後の食事会

元ハワイ別院正法寺・ハワイ開教総監 大山興隆老師ご遷化



大山興隆老師

去る平成16年7月29日にご遷化された、大本山總持寺元後堂（贈西堂）大山興隆老師の本葬儀は大本山總持寺副貫首・齊藤信義老師の秉炬により9月29日岩手県水沢市正法寺で厳修されました。ご生前の活躍を物語るかのように全国から300人以上のご寺院、檀信徒、学校関係等各方面からの焼香があり、さらにハワイからも信徒の代表3名がこの本葬のために来日して焼香を行いました。

老師は、昭和50年3月に駒澤大学依願退職後、同年4月にハワイ正法寺住職（第四世）・ハワイ開教総監に就任、昭和53年10月には乙川禪師を拝請してハワイ開教75年記念法要を修行し、「ハワイ開教75年史」を監修。昭和56年4月にハワイ正法寺を退董帰国後、大本山總持寺侍局長、その後大本山總持寺後堂、平成7年3月に後堂を辞し送行、5月に岩手県水沢市正法寺専門僧堂「僧堂長師家」。平成8年2月25日に大雄山最乗寺にて学生時代からの交友関係の深かった余語翠巖老師の密葬中に倒れてから7年7ヶ月の闘病生活、その間家族の手厚い看護を受けておりました。

ハワイにおける布教活動はさることながら、帰国後も日本国内における国際布教にもご尽力してこられ、SOTO禅インターナショナル発足時は大変なご指導を賜りました。

心から哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

遺偈
溪山雲月
七十有七
無為无事
只伸脚眠
平成16年7月29日
正法寺
識

遺偈

S Z I 通信

ハワイ・モロカイ島カラウパパ半島訪問

S Z I 事務局 太田 賢 孝（東京都大龍寺副住職）

これまでSZIは、各種スタディーツアーの企画、諸団体の海外研修等にアドバイス・講師派遣等を行ってきましたが、2004年9月の東京曹青40周年に因むハワイ研修では、研修の企画と講師の派遣（事前・現地同行）をしました。現地では、両大本山別院正法寺（サンデーサービス）・ワヒアワ龍仙寺・浄土宗別院・真如苑ハワイ本部・マキキ聖城キリスト教会・ミリラニ葬儀所・クアキニ病院等が主な研修先であり、日系人に対する国際布教の現状や宗教者の役割について研修しました。

また特にSZIとして今回の研修で挙げるべき事は、研修オフの日（自由行動日）を使い、飯島事務局長と私のほか、当会会員の野口達朗師（東京福壽院内）の3名が、ハワイで行われたハンセン病隔離政策における収容先となっていた“モロカイ島・カラウパパ半島”を訪問した事でありました。

高度差500メートル以上という世界最大の海岸沿いの断崖絶壁を軽飛行機で舞い降り、半島の大地に立つと、太陽の光からさえも音が聞こえるかのような静かな暖かさを感じました。半島内各所をハンセン病回復者である現地の老紳士が運転する学校バスで巡り、現居住区・強制隔離時代の居住区・英雄ダミアン神父の関連地等々を案内して頂きました。中でも私たちが最も長く過ごしたのが、45基に及ぶ日系人墓地でした。明治以降の日系移民者も多くの方がハンセン病に罹ってしまい、志半ばで強制収容されたのです。私たちは墓前に於いて諷経をあげ、墓石に刻まれている方の尊名を唱えさせて頂きました。

今回の訪問に際しては、多くの方からご尽力賜り、また長野県茅野市頼岳寺の先住故三澤智俊老師が昭和5年に当地を訪れていた事も知りました。多くの方のご援助と道心篤き先人のお陰様が、今回の訪問を実現させたと思います。…カラウパパ半島訪問



S Z I 通信

聖護寺国際安居レポート

S Z I 事務局 大谷 有 為（東京都長泰寺副住職）



国際安居解制日に

熊本県菊池市班蛇口の聖護寺（住職・檜崎通元老師／大智禪師ご開山）では、今回ですでに12回目を迎える恒例の国際安居が厳修されました。期間は、2004年5月10日から7月20日までの約3ヶ月の期間でした。私は、今回も前回同様、SZIより特別講師（通訳）として、参加させていただきました。

さて、今回の国際安居では、外国人安居者の受け入れ方において、前回までのそれとは大きな違いがありました。それは、短期安居者を受け入れたことです。今までは、3ヶ月間のすべての安居期間を聖護寺で過ごせる者しか受け入れていなかったのですが、今回は、さらにそれに加えて、5月のみ参加できる者、7月のみ参加できる者と、短期間でも安居できる者を受け入れたのです。

これは、今、聖護寺で侍聖を務めておられる慈仙師（アルゼンチン出身）の強い要望によるところがあります。

「通常、外国から聖護寺に安居する在家の修行者は、極めて限られた方になります。その多くは仕事を辞めなければならないし、住居を整理して日本に来なければならない場合も多くあります。安居はしたいけれども、実際にはなかなかできないという方は大勢います。せっかく、大智禪師ゆかりのこの聖護寺で安居がされるにもかかわらず、参加者が少ないのはとてももったいないことです。安居期間が3ヶ月に満たない短期間でも可能なかぎり、このような方々へも門戸を開きたいと思い、今回このような形の受け入れを試みるにいたしました」

このような、慈仙師自身が何年も聖護寺の国際安居に参加してきて、実感していたことを具現化したのが、今回の短期安居者の受け入れなのです。実際、今回の安居者は、合計18人を数えました。そのうち、14人が短期の参加者で、残りの4人が3ヶ月の全期間を聖護寺で過ごしました。

安居者を受け入れる回数が増えるということは、旦過寮の期間もその回数だけ増え、生活指導等に当たる役寮の諸老師方、雲水のみなさんにとっては、大変なご苦労、そして云うに云われぬストレスがおりだったと思います。坐禅

の指導をすることと、基本的な生活の指導をすることは、もちろん同じでなくてはいけないのですが、実質的には、かなりの違いが生じてしまうと思います。

なぜなら、坐禅をすること、坐禅を指導することにおいては、安居者自身も坐禅すること自体を求めてくことと相俟って、それほど言語の違いと文化・慣習の違いは障壁になりませんが、僧堂での生活・作法などをすべて細かく指導するということになると、生活習慣の違いが、双方の間の一つの大きな障壁となってしまうからです。

それでも、一人の外国人修行僧が、最後の解制の日に、「みんなで助け合うことによっていろいろな障害を乗り越えることができました」と、笑顔で言うのを聞いたときに、今年もこの国際安居は、無事に円成したのだということを確信することができました。

また、提唱で使用されたテキストも、『Dogen's Pure Standards for the Zen Community(永平清規)』/State University of New York Press から、「Regulations for the Study Hall(衆寮箴規)」を選び、衆寮および、僧堂の規則、規律について講師の先生方が細かく解説をされました。例えば、「寮中の説話、常に応に低声なるべし」、「寮中酒肉五辛を入るべからず」など、実際に自分たちが、僧堂・衆寮での生活を行なうにあたり、順守せねばならないルールを提唱のベースにして、そこから、なぜ、そうしなければならないのかということを説いていくと、文化の違いに戸惑う参加者においても、体系的に理解がなされていたように感じました。

今回の国際安居で一番印象的だったのは、最終日に参加者全員が出席して、2時間以上もかけて行われる反省会で、ほぼ全員が「ここ聖護寺で修行できたこと、そして、ここでめぐり合えた仲間から感謝している」と感想を述べたことでした。その全員の感想に心から同調し、さらに、世界各地からの純粋な心・禅を求める心を魅了し続け、一条に織り成し続けるこの聖護寺の魅力を感じずにはいられませんでした。



毎日行われる朝参にて

寄付者・会費納入者名簿 2004年7月2日～2004年12月1日まで

◆助成金寄付者

ご寄付ありがとうございました。
(敬称略・順不同)

大本山永平寺
大本山總持寺

◆SZI 会費納入者

新規会員並びに会員ご継続ありがとうございました。
(敬称略・順不同)

天龍寺	秋田市	
大矢慈光	岩手県	大慈寺
青木哲夫	文京区	妙清寺
岩本昭典	文京区	吉祥寺
高崎直道	北区	静勝寺
善徳寺	江東区	
黒川浩治	板橋区	
山岸義昭	立川市	立川寺
関岡俊二	多摩市	高西寺
柳周峰	川崎市	全竜寺
市川智彬	横浜市	興禅寺
乾宗俊	小田原市	宗久寺
珠泉院	足柄上郡	
松本力也	千葉市	海蔵寺
東光寺	さいたま市	
岡部雅明	大里郡	普済寺
黒柳博仁	長野市	天周院
山本健善	佐久市	桃源院
元長寺	静岡市	
丹羽義裕	静岡市	一乗寺
戸田規子	安城市	慈光院内
岡島博司	豊田市	永沢寺
洞雲院	知多郡	
江口みさ江	江南市	
渡辺亮正	愛知県	一心寺
中村覚道	北松浦郡	洞禅寺
藏山光堂	大分県	松屋寺
南澤道人	札幌市	中央寺
小島孝尋	宮城県	大雄寺
荘司和成	宮城県	柳徳寺
佐藤孝子	山形県	
落合道正	鶴岡市	田種院
難波真一	鶴岡市	
東光寺	山形県	
大龍寺	新宿区	

大場堅司 品川区
出川成海 ハワイ

◆SZI 特別寄付者

ご寄付ありがとうございました。
(敬称略・順不同)

南澤道人	札幌市	中央寺
大雄寺	宮城県	
興禅寺	横浜市	
戸田道覚	安城市	慈光院
青木哲夫	文京区	妙清寺
大船観音寺	大船市	
東光寺	さいたま市	
延命寺	静岡県	

SZI 動静報告

2004年7月1日
～2004年12月1日まで

8月1日 大山興隆老師密葬
8月4日 会報26号発送作務
8月25日 永平寺主催 夏期大学へ協力
～27日 東京グランドホテル
8月24日 南アメリカ開教100周年記念行事随喜
～29日 ペルー共和国
9月4日 第6回ゆめ観音 in 大船
9月5日 東京曹洞宗青年会主催 ハワイ研修旅行
～10日 講師派遣協力
9月6日 ハワイ・モロカイ島 カラウパ半島
ハンセン病療養所訪問
日系人墓地にて物故者追善法要
9月29日 大山興隆老師本葬 岩手県正法寺
9月29日 役員連絡会 東京
10月18日 ドイツ中川老師との懇談会 東京
会報編集会議
10月21日 日米山桑港寺開創70周年慶讃法会随喜
～26日 サンフランシスコ

※会報編集会議・事務局会は常時インターネットにて行っております。